

数学の「ジャーナリスト・イン・レジデンス (JIR)」プログラムの提案

2010. 9. 22

内容：数学・数理科学に興味があるジャーナリスト・ライター、もしくは数理科学などのバックグラウンドを持ちジャーナリズムに興味のある人が、数学教室に「研究員」、「外部評価員」などの立場で一定期間滞在し、執筆または執筆準備活動を行う。

ねらい：現代社会は科学技術なしに成り立たない。数学はその根幹の一つをなし、たとえば、金融工学や通信の暗号理論はその例である。しかし、その本質はブラックボックス化していて、それを伝える人材は極度に不足している。

最近、事業仕分けで話題になったが、科学研究における巨額の研究予算（宇宙開発、スーパーコンピューター、加速器実験など）の妥当性は国民的な検討課題である。しかし、それらを議論し判断する材料を提供する仕組みと人材は皆無である。

ここ数年、大学や研究者の一般社会へのアウトリーチ活動（サイエンスカフェ、出前授業など）が盛んで一定の成果を収めている。今後の一層の成功には、誰が誰に何をどう伝えるかの差別化が必要である。

このような諸問題の解決を担う人材の創出には、ジャーナリストと研究者の双方向的関係の構築が不可欠である。その実現のため、本プログラムは、ジャーナリストが科学教育、研究の現場に長期間密着することを他分野に先駆けて数学で実践する。

メリット：大学や研究現場にとって、他分野のプロの第三者的視点は貴重である。一方、ジャーナリストにとって、科学研究・教育の実態を知るだけでなく、短期的なアウトプットを求めない再トレーニングの場と機会は、長期的に見て重要である。

ジャーナリズムと科学研究という異なる領域の遭遇において、短期間の取材では達成されない成果が、一定期間の滞在で実現する。

実際の内容：一教室に2－3週間滞在する。できれば、複数に滞在する（連続しなくてもよい）。

時期：2010年12月から可能

受け入れ先の候補：東大・数理科学、東大・生産研・合原研究室、東北大・数学、京大・数学、九大・数理、明治大・数学。

参加者に期待すること：滞在後に数ページの報告書。希望があれば、日本数学会の会員誌「数学通信」に寄稿。期限を設けず、新聞記事、番組制作、本の執筆などあれば大変歓迎する。

待遇：勤務地から滞在先への往復旅費一回分。滞在日数に応じて、日当と滞在費（ただし、勤務地と滞在先が同じ都市の場合は滞在費なし）。報告書への謝礼。

連絡先：藤原耕二（東北大 情報科学研究科・教授）

fujiwara@math.is.tohoku.ac.jp 022-795-4597(office)

JIR の webpage <http://www.math.is.tohoku.ac.jp/~fujiwara/jir/jir.html>

日本数学会 数理科学振興ワーキンググループ